

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
プロジェクト研究（単独プロジェクト研究）
2007年度研究【経過・成果】報告書

研究科名	立教大学大学院 人文科学 研究科	
研究課題	アジアの視座から見た古代都市空間構成の研究 —葬祭礼施設を中心として—	
研究代表者	所属職名	氏名
	文学部・教授	深津 行徳 印
研究組織	所属大学名等・職名	氏名
	立教大学・文学部・教授	深津 行徳
	立教大学・文学部・准教授	久保田 浩
	立教大学・文学部・教授	浦野 聡
	千葉商科大学・商経 学部・教授	師尾 晶子
研究期間	2007 年度	
研究経費	2250 千円	

研究の概要 (200~300字で記入 図グラフ等使用しないこと)

本研究は、トルコ共和国シリオン遺跡について、紀元前3世紀から紀元後7世紀におよぶ、古代都市公共空間の葬・祭礼空間をアジアの視座から再構築することを目的とする。

2007年度には、敦煌莫高窟図像を題材とした研究東アジアの葬・祭礼空間の特徴の把握するため、以下の2つのデータベースを完成させる。

- 1)莫高窟壁画中の中国周辺諸民族像集成
- 2)莫高窟平面図および壁画見取り図

2008年度には、シリオン遺跡の発掘調査西洋古典古代都市の宗教施設における私的建造物・製作物の様相を解明するため、シリオン遺跡の組織的サバイ調査を行い、都市空間における私的要素をマッピングする。

- 1)遺構のトポグラフィの確定
- 2)遺跡全体、遺跡各所の図面(平面図、立面図)作成
- 3)主要建築物の図面(平面図、立面図、透視図)作成シリオン遺跡のトポグラフィを確定し遺跡全体、遺跡各所の図面(平面図、立面図)の作成

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)

[古代ローマ遺跡] [敦煌莫高窟] [葬祭礼施設]

研究成果の概要 (図グラフ等使用しないこと)

2007年度研究経過報告

1. 敦煌莫高窟図像研究について、既存の資料集は、いずれも美術的に価値の高い場面を切り取って図録化したものばかりである。それゆえ、一幅の壁画が全体としてどのような図像の集合体によって構成されていたのかを、容易に知ることができない。さらに莫高窟が宗教施設として機能していた時代には、薄暗い窟内の壁画の一部が人工的に照らされて、講経文によって壁画の内容が説明されていたものと考えられる。現代の美的点からの壁画空間の再構成ではなく、歴史における社会的・宗教的観点からの再構成が、喫緊に求められている。本研究では、莫高窟という宗教施設を復元し、それと敦煌という東アジアの古代都市との相関関係を提示することによって西洋古典代都市研究に新たな視座を与えるため、莫高窟の調査と、二つのデータベース完成を目指した。

調査

日程：2007年10月31日～11月6日、成田～西安～蘭州～敦煌～蘭州～西安～成田

参加者：深津、浦野、久保田

概要：旧敦煌県城と莫高窟の間にある、魏晋南北朝以来の墓地の存在に注意すべきことを確認。莫高窟の西にある西千仏洞が予想外に大規模であったことを確認し、それと漢代の屯田が、旧敦煌県城と莫高窟の関係に類似する可能性を認識。

データベース

敦煌莫高窟平面図および壁画見取り図の作成：平面図はPDFにてデータベース化を終了。実測データは、BIG5コードで入力終了。

敦煌莫高窟壁画中の中国周辺諸民族像集成：『莫高窟形』（台北出版）掲載図像のJEPG取り込み作業終了。

『莫高窟』（中華人民共和国科学出版）掲載図像のJEPG取り込み作業は75パーセント終了。以下の中国周辺諸民族像図像データ取り込み作業終了。206番(主室西壁)、262番(窟頂)、276番(西壁)、277番(北壁)、380番(主室西壁・甕外南)・417番(西壁)・419番(主室西壁・甕外南)、420番(主室西壁・甕外南)、423番(窟頂後部平頂部)、424番(前室窟頂西部)、433番(窟頂後部平頂部)・68番(西壁)、203番(主室西壁)、220番(主室東壁)、242番(両壁倉内)、322番(主室西壁)、332番(主室北壁)・334番(前室西壁)・334番(主室西壁)、335番(主室北壁)、341番(主室西壁)、342番(主室西壁・北壁)、44番(前室南壁)、103番(主室東壁)・194番(主室南壁)、7番(主室東壁)、133番(主室東壁)、159番(主室東壁)、186番(南壁)、231番(主室東壁)、236番(主室東壁)、237番(主室東壁)、240番(西壁)、359番(主室東壁)、360番(主室東壁)、9番(主室北壁)、12番(主室東壁)、18番(主室東壁)、85番(主室東壁)、138番(主室東壁)、141番(前室西壁)、150番(主室南壁)、156番(主室東壁)、5番(主室東壁)、6番(主室東壁)、22番(主室東壁)、53番(主室北壁)、61番(主室東壁)、98番(主室東壁)、100番(主室東壁)、108番(主室東壁)、121番(主室東壁)、132番(主室東壁)、146番(主室東壁)、261番(前室西壁)、288番(前室南壁)、369番(主室東壁)、25番(主室北壁)、172番(前室西壁)、202番(前室南北壁)、203番(前室西壁)、264番(前室西壁)、335番(前室西壁)、436番(前室西壁)、454番(主室東壁)

2. 研究分担者の浦野を中心に、海外研究協力者タネル=コルクート氏(アクデニス大学)とともに・1996年マールブルク大学シリオン遺跡表面調査の成果をもととした、2008年度の同遺跡発掘計画を検討。発掘に先立ち、トルコ政府に発掘許可を申請し、その後に労働ビザを取得しなければならない。タネル=コルクート氏の助言に従い、シリオン遺跡調査の前段階として、トロス遺跡教会区について研究会を行った。なお、同研究会には、古代ローマ都市・建築史を専門とする東海大学産業工学部渡辺道治教授の協力を得た。

調査

日程：2008年3月21日～29日、成田～アンタルヤ～トロス/パタラ等～アンタルヤ～成田

参加者：浦野、渡辺

概要：

研究成果の概要 つづき

- 1) トロスは、リキア地方の諸都市が結成していたリキア同盟の30都市のうち、もっとも有力な5つの都市のひとつであり、古代末期には司教座が置かれて継続して繁栄した都市であった。他の4都市と比べて最大の特徴は、ほかが海港都市、ないしは、海港を服属都市に持ついわゆる地中海の海域型都市であったのに対して、トロスは、広大な領域を有する内陸型都市であったという点である。この型の都市は、ピシディア地方からカリア、フリュギア、リディア地方にサガラッソス、テルメッソス、オイノアンダ、キピラなどいくつか有力なものが存在したが、海域型都市に比較して発掘調査が遅れがちであった。その理由は、険しい山上に存在することが多く科学的調査のための機材を運び込めないことと、ギリシア・ローマ的地中海世界の経済的・文化的流通の観点からは非典型的な事例とみなされたことにある。
- 2) 20世紀後半以来、サルデス、ヒエラポリス、アフロディシヤス、もっとも最近ではサガラッソスの発掘調査が進み、内陸都市の豊かな経済力や強力な政治・軍事力などの点から、地中海文明の形成と発展に果たした役割が再評価されつつある。トロスの発掘調査は、紀元前2000年紀から、紀元後600年くらいまで深刻な断絶を経験せず継起的に発展してきた地中海世界、内陸都市文化に、ひとつの典型を付け加えてくれる可能性が高い。
- 3) 表面調査から、教会のあった街区には、教会建設以前は都市の主神が祭られていた公算が大きいと推測されている。それは、当街区が、劇場・アゴラ・浴場に囲まれたいわゆる都市内の「一等地」であり、神殿に関わる碑文と、祭壇の一部と思われる牝牛のレリーフが発見されているからである。この街区の発掘によって、キリスト教公認・国教化以前と以後の地方都市の宗教的施設の変化・改変を知ることができる意義は大きい。

以上

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

※

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多 場合 主要なものを抜粋してください)

- ①雑誌論文 (著者名、論文題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ② 深津行徳共編、春風社、『人文資料学の現在Ⅱ』、2008.9 予定、
浦野聡共編、春風社、『肖像』、2008.4、